つたところが、一休が「現時の僧侶の墮落は、寔に痛嘆の次第で、佛は五百戒を保持せらるゝに、責めて五戒だけなりとも保たせ度きものである」と言ふと、新右衞門「左樣沙門は云ふに及ばず、世俗も亦之を保持し度きものであります」と答へた「いや俗人は是非もないが、天下にあらゆる物は、皆この五戒を保つものはない、例へば今、この僅か一尺ばかりの扇子でさへも、五戒を破るのであるから、況して僧俗の五戒を保たぬは是非もない。」新右衞門「さて〳〵不思議の事を承るものかな、扇子が五戒を破るとは、初耳であります、さあそのわけ承りましよう」とつめ寄つた。一休徐に說いて曰はく、

一、扇子が殺生戒を破るとは、竹を截りて骨とするからである。

二、扇子が偸盜戒を破るとは、虛空の風を偸むからである。

三、扇子が邪淫戒を破るとは、要と要とを合はせるからである。

四、扇子が妄語戒を破るとは、書そらごとを書いてあるからである。

五、扇子が飲酒戒を破るとは、開いてざゝんざ言ふからである。

すると、さすがの新右衞門も承服したが、唯偸盜戒に就いては、合點のゆかぬ

ところがある。そこで「古語にも扇是日本扇、風不日本風とあれば、扇子は是れ日本の扇子を動しても、風は日本に限るのでなく、所謂千里同風と云へば、これを盜むとは云はれますまい」と詰つた。一休突然「新右衞門殿」と呼びかけ、新右答るや否や、一休一首を詠んだ、

春もなく香もなき人の心こそ呼べば答ふる主も盜人

新右衞門、たゞ成程と感じ入るのみであつた

二十三、口授と書授と

京都に、喉痺を治療する秘法を知つて居る老人があつた。一休その效能の尋常でないといふことを聞き、どうかしてそれを世の中に擴めて益を分ちたいと思ひ、或る日その老人を訪ねて、秘法の口授を賴み入れた。ところが、老人の言ふには、「これは誠に祕々密々の法であつて、誰にも敎へるわけにはゆかないのであるが、外ならぬ貴僧の事故、他人には必ず口授しないといふ誓約をなされば敎へましよう」そこで一休は、他人には、決して口授しないといふ證文を入れてその法を敎へて貰ひ、歸るや否や、その法を立札に書いて、諸方

の辻々へ出した。それを見た彼の老人、怒るまいことか、直に一休のところへ出かけて往つて、前の證文をつきつけ「三界の大導師ともある出家の身が、證文を反古にするとは、何といふ不埒なことぞ」と怒鳴りつけた、一休は極めて平氣なもので「イヤなに、口授しないといふ證文は入れたが、書授しないといふ誓約はしたことがない」とぬけられて、老人忌々しくはあるが、その上の責めやうも一寸胸に浮ばなかつたので、ぶつ〳〵言ひながら、そのまゝ歸つたといふことである。何事によらず、世間のためになることなら、少しは無理なことをしても、これを弘めやうといふ彼が精神は、誠に尊いことであると思ふ。

二十四、雀の死活

或る生意氣な男が、雀を一羽掌に握つて、一休のところへやつて來て、「和尚さん、この雀は活きて居りますか死んで居ますか」と尋ねた。若し一休が活きて居ると言つたら、握り殺してしまはう、死んで居ると言つたら逃がしてやらう、さて何と返事をするであらうかと待ち構へて居ると、一休それを察して、

たゞ一語「無」と答へたばかりなので、その男挨拶もせず逃げ去つてしまつた。其後一休、事のついでに、彼の生意氣男の宅に往き、そこの敷居をふみまたげたまゝで、その男を呼び出し「どうぢや亭主、愚僧は今、この敷居を出るか這入るか」その男何の答も出來ず、たゞ手を拍つて笑つたといふことである。

二十五、一休の臨終

一休和尚の末期の句であるとて、世間に傳へられてあるもの一二にして足らないが、或る處の自畫自讃に、

朦々而三十年、淡々而三十年、朦々淡々六十年、末期晞糞捧梵天、

そして後に、

借用申昨月昨日、返濟申今月今日

借置し五つのものを四つかへし本來空にいまそもとづく

又或る處に藏せる自畫自贊には、長髪蓬々として眼を屹と開き、うす赤き衣を着け、丸竹の杖をつき、倚子に腰を打掛けたる姿で、その贊は、

柳は綠、花は紅、

行脚事畢、今日時節、折主丈子、燒六月雪、

虛堂之再來天下之老和尚一休宗純末期書之

是の如く、種々相異つては居るが、兎に角、彼が尋常の人でなかつたことは、想ひやられるのである。

題茶釜（「諸國物語」）

有口不言全體圓、不離色相絕諸緣、併呑大海江河水、吐出趙州一味禪、

題黃鶯

鳥亦說經似度仙、樹頭樹底妙音多、林間花若諸菩薩、中有黃鶯小釋迦、

題蚤

垢邪塵邪是何物、元來見來更無骨、雖爲人喰十分肥、瘦僧一抓沒生涯、

題虱

獨臥寒衾患幾千、餘身貧極有誰憐、夜深依被半風食、天至曉鐘未作眠、

贊兒交狀

看畫忽忘七佛師、雲鬢霧鬢少年姿、手中經卷是何字、定有愁人小艷詩、

贊大黑

大黑尊天其面黔、諸人信仰置棚陰、平生愛鼠是何事、足下平囊無用心、

歲旦

有錢有酒有金銀、今歲初成大德人、當寺仙山若僧達、朱串案內往來頻、

第十章　歸結

身は高貴の方の血を受けながら、賤が伏屋に呱々の聲をあげ、少壯にして、時の宗教界の腐敗墮落を慷慨し、これが革新に手を染めようとして、又失敗したところの彼一休は、一時厭世の淵に沈まうとして、辛くも樂天の境に歩を轉じた。幼い時から、機智には富んで居たが、どちらかといへば、まじめの方であつた彼一休は、こゝに至つて、滑稽洒脫、風流無礙の奇僧となつたされど彼は、厭世の極捨鉢的樂天主義の人となつたのではない。彼自身は、常に向上一路の光明を直觀して、一歩一歩、理想に向つて進み近づいて居たのであるし、又一切衆生を濟度しようがためには、五十有餘年の間、席暖なるの暇がなかつた位である。

既に、その素姓が卑しくない、縱令、どんな事情があらうとも、母子二人が、安々と生計を營む位の事は、出來たであらう。又、縱令、佛門に入つたとしても、學資に困つて、香包を作るといふやうなことまで、しなくともよかつたであらう。

又、縱令、貧窮苦學は已むを得なかつたとしても、當時さ程でもない凡僧が、堂々たる大寺の住持となり、紫衣を賜はり、師號を謚られたことに比べて見れば、彼が學の識の德を以てして、しかも尙八十有餘歲の高齡に達して、纔に大德寺の住持たるべき勅諚を拜し、歿後また何等の恩典にも浴しなかつたといふものは、如何にも權衡のとれない話である。勿論、彼一休にして、若し尋常一樣の俗僧であつたならば、一身の榮達を計るがためには、隨分、宮中へも參內して行つたであらう、柳營にも出入したであらう、壯年にして早く既に大寺の住持ともなり、紫衣の僧ともなり、師號を謚つて貰ふ位の事は、苦もなく出來たであらう。否、身分ある彼一休にして、若し些しでも、さうしたやうな考があつたならば、望んで得られないといふことは、なかつたかも知れない。しかし、彼は、時の臨濟僧に對しては、縱令それが、先輩であらうが後進であらうが、隨分手ひどく攻擊もし、喧嘩もし、現に彼が五十一歲の時には、舜日峰(大德寺第三十六代)の入寺を拒まうとしたり、五十三歲の時には、日峰の徒太平を喝破したり、六十一歲の時には、法兄たる養叟和尙(大德寺第二十六代)と大喧

嘩をしたり、六十四歲の時には、春浦和尙(大德寺第四十代)を痛罵して、その徒から害を加へられようとさへしたこともあるといふやうな工合で、從つて彼等のために憎まれ嫌はれ怨まれたといふやうなことも、多少彼が榮達を妨げたかも知れない。然り、勿論それも一原因であつたであらうが、實は彼は、當時の一般宗敎家としては、餘りに見識が高すぎ、餘りに弘法の念が强過ぎて、そんな師號だの紫衣だのといふものは、彼の眼中になかつたのである。これを以て彼は、切名利達を糞土と見、富貴榮華を浮雲と眺め、一簑一笠に甘んじて、專ら化を四方の群生に布いたのである。卽ち彼は、

名利と申すは、其身の名をあげ、人にほめられんとおもふ心をたねとして、堂塔を建立し、時の富貴におごれり、かくの如き人を、佛はふかくきらはせ給ふ。

といひ、

へつらひてたのしきよりもへつらはで貧しき身こそ心安けれ

といひ、

迷道衆生劫外愚、　人々涙不識窮途、　諛官只願佳名發、　眞菩提心一點無、

といひ、

昨日俗人今日僧、　生涯胡亂是吾能、　黃衣之下多名利、　我要兒孫滅大燈、

といひ、恩師華叟が、掩光二十年の後、大機弘法禪師號を勅諡せられし時、養叟和尙に寄せた賀詩に

曾謝塵寰五十年、　芳聲美譽是何禪、　覿面辱屍三百鞭、

懶瓚辭詔也何似、　猥芋烟鎖竹爐裡、　大用現前眞衲僧、　先師覿面潑惡水、

といひ、又臨濟曹洞の善知識が、貪欲熾盛なのを見ては、

米錢膝下露堂々、　辛苦沈淪萬劫腸、　賦智不妨過君子、　德山臨濟沒商量、

と言へるが如き、當時權貴の門に出入するを以て、誇りとし、利欲の念の長じて居た臨濟僧とは、頗るその撰を異にして居たのである。

彼は、この見地から、社會の根本的改善を計らうとした。一面、時の社會の腐敗墮落を救濟して、これを道德的に改善しようと企て、一面、更にその根本に溯つて、道德の扶植は、結局信仰問題の振作にありとし、頻りに布敎傳道を試み

たのである。而して社會を根本的に改善し、信仰問題を振作するといふ段になると何時でも第一に邪魔になるものは迷信である、虛儀形式である。人の心に迷信の波の立ち騷いでゐる間、人の行が虛儀形式の繩で縛られて居る間は、到底改善の實は擧がらないのである。若し夫の迷信を勦絕し、虛儀形式を破却し得むか、社會の改善は、ここにその半に達したものと言つてもよい。今彼一休は、果して如何にして、社會の根本的改善を爲さむとしたであらうか。果然彼はまた、この迷信の排斥と、虛儀形式の破壞とに向つて、まづその手を下した。卽ち彼は、人が死後の追善供養によつて、成佛するとかしないとか思惟せることの迷妄なるを見て、

追善にあうた佛が盆棚へ年々くればうかむせはなし

と一擊し、又當時、京都の諸寺から、毎年七月十四日に、宮中へ盆燈籠を献納するといふ、虛儀形式の甚だ愚なるを厭ひ、

精靈今日出來迎、　雨露直供萬葉棚、　挑得燈明天上月、　松風流水讀經聲、

と喝破して、遂にこの、朝廷に對する年來の恒例を廢するに至らしめた。（第九

章「一休の逸話」第七參看）ところが、この事を聞きつけて驚いた有象無象が、一休のところへ押かけて來て、盆燈籠や精靈棚の用無用を詰つた。一休答へて「イヤ〳〵大きな精靈棚が飾つてある、ドレ見せてやらうか」と、一同を鴨川の邊まで伴れて行き、川の彼方を指して兩手を擴げ、「それ見よ、彼處ぢやく。」

山城の瓜や茄子をそのまゝにたむけになせや鴨川の水

この國中の瓜や茄子を精靈棚に見立て、この鴨川の水を手向の水にしようではないか」と言つて、哄笑一番したといふことである。ただこれ僅に一例にしか過ぎないが、此くの如きは、實に彼が慣用の手段であつて、毫も珍とするに足らないのである。

又彼は、常に自由討究の主義を唱へて學徒に告げ、古則經論の敎權に盲從し、徒に坐禪觀念しても、勞して功なきことを說いて曰はく、

凡參禪學道、須勤絕惡知惡覺、而至正知正見也、惡知惡覺者、古則話頭經論要文、學得參得、坐禪觀法、勞而無功者也、如是之輩、當代四百四病一時發、爲人所辱、是情識之血氣也、對閻老面前、有甚伎倆乎、獅子尊者斷頭、白乳顯露分明也、

正知正見者、日用坐斷涅槃堂底工夫、全身墮在火坑、子細看之、苦中有樂、若能見得、不昧撥無因果境、若見不得、永不成佛漢、可懼々々、

と、由來、禪宗は、佛敎各宗の中でも、最も自由討究的の態度を執るものではあるが、法要や御祈禱や俗權のために頤使せらるゝとの外に、餘り能のなかつた當時の臨濟宗中に在りて、尙且この言を作したのは、以て彼の偉なりしことを證するの、一材料とするに足るではないか。

又彼が、未來主義に反對して現世主義を主張するに努めたること、その勢頗る旺なるものがある。まづ彼は世人がややもすると、我が身はわろきいたづらものなりと思ひつめて、偏に佛陀の大悲を仰がうとするのを嘲つて曰はく、

つくり置く罪の須彌ほどあるならば閻魔の帳につけどころなし

世の中に慈悲も惡事もせぬ人はさぞや閻魔も困り給はむ

痛快の言、吾人は血湧き肉躍るの感を禁ずることが出來ない。更に未來世を非としては、

本來もなきいにしへの我なれば死にゆく方も何も彼もなし

死して後いかなるものとなりぬらんめし酒だんご茶とぞなりぬる

といひ、我以外に佛といふものを認め、その力を借らうといふが如き、意氣地なしを罵つて、

元の身は元のところへかへるべしいらぬ佛をたづねばしすな

ゆく水にかずかくよりもはかなきは佛をたのむ人の後の世

佛とて外にもとむる心こそまよひの中の迷なりけれ

と叫び、地獄を恐るゝ呆氣者を見ては、

みな人の貪瞋愚痴の惡水は三途の川の流れとぞなる

六根につくる罪過のちりほこり四手の山路の高根とぞなる

鬼といふおそろしきものはどこにある邪見の人のむねにすむなり

と叱りつけ、更に現世主義の眞面目を吐露しては、

世の中は食うてかせいでねて起きてさてそのあとは死ぬるばかりぞ

と言つて居る。然り實に人世は食うてかせいで寢て起きて、さてそのあとは

死ぬるばかりである。されどこゝに注意しなければならないのは、物質的盲目的の現世主義と、吾人の謂はゆる現世主義とは、似て非なるものであるといふことである。前者はただ社會目前の利害を見るのみであつて、永遠の理想的發展を認めないところの短見であるし、後者は卽ち自己の活動、社會の進化の上に樂天を觀じ、死と共に個性は絶滅するけれども又更に社會的永遠の生命があるといふことを確信し、この立脚地に腰を据ゑて、進修不息、以て理想の實現を期するといふのである。今この一休の現世主義も、また夫の淺薄なる物質的現世主義ではなくて深遠なる理想的現世主義であることは、言ふまでもない。

又世には、人間を以て、つまらないものである、意氣地のないものであるとして、ただ一も二もなく、神に縋り、佛に賴らうとするものがある。その誤れること、殆んど言ふを價しないが、一休はまた、これをも見逃さずに、攻擊して居る。まづ彼はその汎神觀を歌つて曰はく、

あめあられ雪や氷をそのまゝに水と知るこそとくるなりけれ

吾人人類は、卽ち唯一絕對の顯現であつて

雨あられ雪や氷とへだつればおなし谷川の水

絕對は、卽ち吾人人類のすべてである。こゝに於て、

釋迦も又あみだももとは人ぞかしわれもすがたは人にあらずや

といふ、大覺悟に到達するのである。夫の人生問題といひ、心靈問題といひ、何といひ、彼と言ふ、悉くこれ自分の力を傾倒して、解決すべきもの、我以上に佛を仰ぎ、我以外に神を求むること、畢竟何等の妄想ぞ。彼乃ち曰はく、

我心そのまゝ佛いき佛波を離れて水のあらばや

夜もすがら佛の道をたづぬればわがこゝろにぞたづねいりける

成佛は異國本朝もろともに宗にはよらずこころにぞよる

と、よく這般の消息を、傳へ得たものといふべきではないか。

以上の外、なほ一休の見識の頗る卓越せるものあることを、見ることの出來る一事がある。言ふまでもなく、宗敎は、信念を生命として、人の心靈界を支配すべきもの、政府の保護を哀請したり、政府の勢威を假つたりすべき筈のも

のではない。若しどうしてもそんなものゝ力を借らなければならぬと言ふやうになつては、最早、その宗敎は死滅に近づいたものである。まして、これによつて虎威を借る狐もどきに、他宗他派に當らうなどゝは、言語道斷沙汰の限りである。然るに一休は、當時、權勢に阿附してその威を假り、時の政治に容喙し得るを以て無上の榮譽と心得たる俗僧の輩に倣はず、全然俗權の保護干涉を避け、鋭意熱心、社會の下層に化を布いたのは、流石に偉僧の行といふべきではあるまいか。

此の如く、彼一休は、眞摯熱烈なる信念に鞭つて、平民的敎化に從ふと共に、社會の改善を忽にしなかつた。迷信の排斥、虛儀形式の破壞にも力を致した。而して其自由討究主義を主張しては、敎權を重んずるに足らないことを敎へ、現世主義を說述しては、未來生活を難じ、汎神觀の立脚地よりして、一神の存在を非認し、且、政治の保護干涉をも之を歎ばなかつたといふに至つては、その見解の、頗る吾人のそれと、相一致する者があるに驚嘆するのである。

吾人の見解とは何であるか、吾人は、今(昭和十七年)を距ること四十餘年の前

『新佛敎徒同志會』といふ一團體を組織して、六條の綱領を發表した

一、我徒は、佛敎の健全なる信仰を根本義とす。

二、我徒は、信仰及道義を振作普及して、社會の改善を力む。

三、我徒は、宗敎の自由討究を主張す。

四、我徒は、迷信の勦絶を期す。

五、我徒は、從來の宗敎的制度及儀式を、保持するの必要を認めず。

六、我徒は、宗敎に對する、政治上の保護干涉を斥く。

蓋し、現代社會の腐敗を慷慨し、現代宗敎の墮落を痛憤し、これを洗滌し、これを救濟しやうといふ、一片耿々の志の露現したものである。今此の明治の聖世を以て、室町時代に比するのは頗るその當を失するのであるが、闇黑であつた室町時代に於て、一休の如き偉僧の誕生を要したやうに、明治の現代社會には『新佛敎』が興起しなければならなかつたのであるか、否明治の現代社會に『新佛敎』の興起したやうに、闇黑であつた室町時代には、一休の如き偉僧の誕生を要としたのであらう。

附記

世間に流布して居る一休和尚の事蹟には、隨分甚しい誤謬のあるといふことは、前既にこれを述べたのであるが、今その重なる二三の事柄に就いて、愚見を述べて置かうと思ふ。

一、一休と大德寺

一休和尚と言へば、誰でも直ちに、紫野の大德寺を想ひ起し、彼が出家の始めからずつと大德寺に居通したものでゝもあるかの樣に考へて居るらしいが、そは甚しき誤りである。彼が一廉の僧侶となつてからは、大德寺內の如意庵に住したこともあり、又彼が師匠の華叟や法兄の養叟などが、大德寺の住持となつたところから、自然大德寺とは深い關係もついては居たが、彼が大德寺の住持となり、「大德寺の一休」と言はれることの出來るやうになつたのは實に彼が八十一歲の時である。それとても、ただ名前ばかりの住持であつて、絕えずそこに居たといふ譯ではない。現に彼が終焉の地さへ、大德寺では

なくて、薪村の酬恩庵であつた位である。(酬恩庵について因に記す。元來一休は一簑一笠、身は行雲流水のどこと定まつた住家もなく、又永く一所に停住して居たのでもない。ただ所々方々駈け廻はつて、專ら平民的教化に從事して居たのであるが、その中でも、山城薪村の酬恩庵は、餘程氣に入つて居たものらしく思はれる。この酬恩庵といふのは、大應國師が開かれた、妙勝寺といふ名刹の境内の一小庵であつて、最初この庵に何か怪しげなものが時々出るとかで、誰が住持になつても、其夜のうちに居なくなるといふ始末、村のものも困つて居るところへ、一休が往つて、だん〳〵詮索し、庵の椽の下に、金瓶が三個埋めてあつたのを發見し、それを然るべく分配して、この庵を立派に建て直し、一は先住追福の意をも表し、一は自分の住居としたのである。かういふ因縁もある上に、都離れて居るから、當時世の中のどさくさの影響もなく、殊に風景も好いので、屢々こゝに錫を留めるに至つたのであらう。)

二、一休と養叟

一休が、六歳の時に、大德寺の養叟和尚の弟子になつたといふのが、普通に信

ぜられてゐる事實であるが、これも殆ど辨明を要しない程の著しい誤謬である。彼が六歳の時に、安國寺長老像外鑑の侍童となつたといふことも、十三歳の時に、慕喆攀公に詩を學んだといふことも、十七歳から五年の間、清叟仁藏主と爲謙翁とに就いて研鑽したといふことも、二十二歳の時から、江州堅田の華叟に就いて苦學したといふことも、一點疑ふべからざる事實であつて、殊に養叟も一休も、共に華叟の弟子で、ただ養叟は一休の法兄であつたと言ふだけである。一休が廿六歳の時、養叟が、華叟の像讃の事から、ひどく華叟の怒を招いた、時に一休がとりなして、華叟をなだめ、養叟を警めて、「兄能く膽を嘗めて忘るゝと勿かれ」と言つたのも『延寶傳燈錄』に、華叟の法嗣として六人を擧げ、その第一が養叟で、第二が一休としてあるのも、共に彼等が法兄弟であつたといふことを證するに足るのである。そして、華叟は、養叟よりは寧ろ一休を愛し、一休を信じ、一休に望を屬して居た。それは、華叟が一休に與へた夫の遺偈の奥書に徵してもわかるし、又一休が廿九歳、如意庵で三十三回忌齋を行つた時に、光日照といふものが、華叟を尋ねて來て、「和尚百年の

後法を付するは誰人ぞや」と問うだら、華叟が「風狂といふと雖も箇の純子あり」と答へたことに徴しても、知ることが出來るのである。又一休と養叟とは、その年齢が、僅に十八歳しか違つて居なかつた。これを坊間傳へられて居る、夫の白い長い眉で、テラ〳〵ひかつた頭の大德寺養叟老和尚が、六七歳位の小坊主の一休と、魚の引導の掛合をする繪なんぞに考へ比べて見るとただ噴飯に堪へないのである。

三、一休と義滿

一休がまだ小坊主の時に、大德寺の養叟和尚が、時の將軍義滿のところへ連れて行つて、義滿が一休をして、衝立に畫いてあつた虎を縛らせるといふ話などは、一休の事蹟中、最も光輝ある部分として、語り傳へられて居るのである。しかし小供の時には大德寺に居なかつたといふことも、又養叟和尚の弟子ではなかつたといふことも明になつて見ると、この話も半分は嘘といふことになる。しからば義滿將軍に面謁したといふのは、事實であるかどうかを吟味して見るに、一休が義滿に謁したといふことは、『野史』にも出て居て、そ

の一休の傳の中に、

應永十八年、見『大將軍足利義滿于僧仁清室』

とあるが、しかし、足利義滿は、應永十五年に薨去になつて居る。十五年に薨去になつた義滿に、十八年に面謁するといふのは、勿論受取れない。これは定めて、何等かの間違であらう。して見ると、義滿に面謁したといふことまでが嘘であるといふことになつて、從つて畫虎を縛るといふ面白いお話も、種なしになる譯である。

ところが、『一休年譜』には、一休が十八歳の時、顯山相公が清叟仁の庵室に到り、その時一休が始めて相公に謁したといふやうに記してある。(本書第五章六十一頁參看)顯山相公とは卽ち足利義持の事で、『後鑑』義持將軍記第十七(應永十八年)十二月の記に、

是月、將軍家渡『御仁清庵室』僧一休拜謁。

とあるのを見ると、これはどうしても、義持將軍に謁したといふのを正しいとしなければならない。それも、一休が師匠清叟仁藏主の庵室で謁したので

あつて、こちらから推參して、拜謁を許されたといふやうな次第ではない。して見ると、大德寺の養叟和尙が、一休を連れて義滿將軍に謁したといふ話は全然無根であるといふことになるのである。

四、一休の子

こゝに一つ重要な問題がある、それは一休に一人の子があつたといふことに就いてである。禪宗は勿論、肉食妻帶を禁じてある宗旨であるが、しかし、此の宗の坊さん達は、この禁戒を破ることを何とも思はないこと、實に不思議な位である。一休もまた酒も飲めば肉も食べる。隨分女犯もやつたらしい。『狂雲集』に、

同門老宿誡余婬犯肉食、會裡僧嗔之、因作此偈示衆僧云、

爲人說法是虛名、　俗漢僧形何似生、　老宿忠言若逆耳、　昨非今是我凡情、

といふ偈さへ載つて居るのを見ても、彼が公々然として、婬犯肉食したといふことがわかる。實は當時の老宿といふやうな連中でも、隨分一休そこのけッといふ勢で、婬犯肉食して居たものもあつたのだらうが、彼等はさすがに公

々然としてこれを行ふ程の勇氣がなかつた。否それほど正直ではなかつた。陽に、道德堅固に行ひ濟して居るやうな風をしながら、陰に、天蓋を被り、般若湯を飲み、大黑の膝を枕にするといふやうなことは、盛に行はれて居たのである。此くの如きに比し來れば、一休が公々然としてこれを爲して、毫も憚る色のなかつたのは、寧ろ無邪氣にして、頗る諒とすべきものがある。一休の意或は、肉食妻帶の眞理を看破したるにもよるべく、或は當時の老宿等が言行相表裏せるを諷刺せんと欲せしにもよるのであらう。

そは兎に角、一休の子の事については、

僧となり、名を紹偵號を岐翁と言つたといふこと。

攝津の櫻塚、及び堺に居たといふこと。

明人の畫いた一休の像に、「尺八聲々吹又吹、淫坊酒肆一生棲、瀟洒途轍少人踏、眼見東南竟北西」といふ讃をしたといふこと。

明應七年二月に、少納言菅原和長に、下炬偈を授けたといふこと。

明應七年に七十二歲であつたといふこと。從つて、應永三十四年の生れで、

一休が三十四歳の時の子であるといふこと。

ただこれだけしかわからない。『大日本史』や、『野史』にも、菅原和長の『明應三年記』などを援いて、紹偵の事を書いてあるが、矢張りこれ以上の事は記してない。若し『明應三年記』といふものでも見たら、多少得るところもあるであらうが、遺憾なことには手に入らない。その母はどういふ人であつたかといふこともわからず、又紹偵が何歳まで壽命を保つて、何處で示寂したのかといふこともわからない。さりとて、全然これを抹殺するといふことは、猶更出來ない、ただ、大方博雅の諸君子の、垂教を待つばかりである。

附錄

一　一休和尚行實

一休和尚母藤氏、南朝簪纓之胤、事後小松帝能奉箕箒、帝寵昵焉、或人譖曰、彼有南方志每袖劍伺帝、因出宮闈、而入編民家以產、師雖處襁褓之中、有龍鳳之姿、世無有識者、應永廿二年乙未、師廿三歲、初赴江之堅田謁華叟、廿五年戊戌、師廿五歲、一日聞瞽者演妓王失寵落飾之事、忽於雲門放洞山三頓棒因緣投機、華叟一日書一休二大字、與師爲號、廿七年庚子、師廿七歲夏夜聞鴉有省、卽擧所見、先師曰、此是羅漢境界、非作家衲子也、師曰、某只喜羅漢、而嫌作家耳、先師曰、儞是眞作家也、先師欲偈、記之曰、十年以前識倩心、瞋恚豪機在卽今、鴉唳出塵羅漢果、昭陽日影玉顏吟、師作此偈、乃是年五月廿日夜也、五月先師書一券、力腰疾輿赴京、囑宗橘夫人、付一帖子曰、吾暮景已迫、西崦行脚在近、此帖子是靈山如意、及老僧遞代家券也、前年付純子、彼擲地拂袖去、彼之豪邁非可彊也、橘爾待彼豪氣稍屈、付託時熟、以付之、是老僧願命也、欽哉、後花園天皇正長元年戊申、師卅五歲、六月廿七日、華叟師寂焉、開訃倉皇拉成子、赴堅田以致祭、一七日諸徒各散、師次日亦還

京、八年丙辰師四十三歲、是年當開山國師百年遠忌、師往拜、九年丁巳、師四十四歲、師暫寓源宰相館、一日心地不快、竊意謂、今佛法混亂、無具大眼目者、龍蛇不辨、邪正駁襍、纔持一紙券、則皆曰我嗣其法、浩々如麻、膿徒之覆轍、其可不戒哉、卽命相公開故篋、把遞代券、段段花擘、命相公成沉二子、於師面前令燒却了、源相外縫掖而內伽黎、久響師風、故橘夫人囑託之源相、十二年庚申、師四十七歲、六月廿日徒門老請師入住如意菴、廿七日設先師華叟和尙一十三回之忌齋、廿九日、一偈題校割末以貼菴壁、一偈呈養叟老人、以致退席之意、包笠徑歸、乃七月朔也、嘉吉二年壬戌、師四十九歲、初入讓羽山、借民家住、有山居偈、後創尸陀寺徙焉、文安四年丁卯、師五十四歲、龍山多故、數僧獄繫、一門心酸、秋九月、師心疾革、潛入讓羽山將食死、事達宸聽、卽降勅批曰、和尙決有此舉、佛法王法俱滅、師豈舍朕乎哉、師豈忘國乎哉、師答勅曰、貧道亦率土之一民耳、命可敢辭耶、重陽日述九偈以示衆、月尾歸京、享德元年壬申、師五十九歲、師遷瞎驢菴、菴在賣扇菴南、長祿元年丁丑、師六十四歲、夏末入薪、居十餘日、細川源京兆略致外護之意、且闢幕下館、迎侍甚渥、三年己卯、師六十六歲、或人賣虛堂祖翁唐本畫像、上有自贊、休子率金購、以措酬恩常住、時像猶在京酬恩、塔主夜夢瞎驢和尙得々來、翌早說夢、等子時居酬恩、所夢偶同、而不敢言、午後果虛堂像至、掛壁各拜、塔主曰、夢乃瞎驢和尙、而覺則虛堂

祖翁、堂其和尙前身乎、如夢而來、不亦奇哉、等子亦說人曰、夢乃有同乎、春初領住德禪之請、疏仍表視篆之義、入而禮祖塔者三、揷香大展了、次詣光日照一楫、寬正元年庚辰、師六十七歲、華叟師入滅、己三十三回忌、三年壬午、師六十九歲、秋八月患痢、諸子咸曰、師逝也、師曰、吾必無恙、九月痢止、心地稍快、十三日、避亂寓桂林尼寺、四年癸未、師七十歲、七月入賀茂山、寓大燈寺、臘尾歸瞎驢菴、應仁元年丁亥、師七十四歲、六月兵起京師、八月師出瞎驢、徙東麓之虎丘、是時都下大亂、瞎驢亦燬乎兵火矣、九月朔、師出虎丘、入薪之酬恩菴、先是十餘年來、師每誡諸徒曰、兵氣其兆焉、雒京其潰焉、汝等急打辦旅裝、備於倉卒、或臻乎、作爲偈句以警之、於此人皆服師先見、二年戊子、師七十五歲、五月十五日、設大會齋、緇白來赴、妙勝酬恩、方來殆無措足地、蓋修靈山和尙一百年之遠忌也、文明元年己丑七月、西兵入薪、徑入餅原之慈濟菴、八月二日、出餅原入南京、方一宿也、三日入泉信宿、五日出泉、僑住吉浦之松栖菴、二年庚寅、師七十七歲、有一檀越、占菴坂井之上、以延師、師喜而携諸徒徙、扁其菴曰雲門、蓋以龍山雲門祖塔亂後草白、聊存其名、以擬靈光巋存也、六年甲午、師八十一歲、二月廿二日、廣德柔仲和尙捧勅黃來、致大德住持之請、八月染瘧、月尾少間、茲年衆已踰一百餘人、師不懌曰、靈山和尙會下衆不滿百人、吾何爲乎致有之也、八年丙申、師八十三歲、四月瘧疾少發、疏圖有隙地縛茆以館、柔

仲和尙諸徒求扁、扁曰、床榮、且偈以示衆、臘月衆求三轉語、師垂示三轉曰、天喬地厚、赤肉白骨、逼塞乾坤底、大人境界也、恁、三世了達漢、如來禪耶、祖師禪歟、這兩轉語須到彌勒下生辰、九年丁酉、師八十四歲、床榮菴南畔修竹成林、宜乎納凉、師每夏苦熱甚、竹間構小亭、刈蘆爲葺、編竹爲床、師乘轎子行、半日消搖、扁亭曰多香、多福香巖、風流可慕、仍作偈以題亭之側、九月河兵入津、廿八日、籃輿赴泉之小島、居半月餘、十月十八日、發島宿安松之草舍、十九日、衝雨歸墨、江之舊栖、神主出迎驩甚、月尾微恙不病而間焉、十年戊戌、師八十五歲、二月中浣、師預推如意祖翁一百年遠忌、却後十又二年已酉歲也、吾旦暮人也、急命諸徒、率財營供于慈恩寺、請鄰封僧尼、實三月初九日也、十二日、出住吉浦赴薪、六月捨墨江雲門于龍山、欲復靈光祖塔也、七月再創如意祖塔而落焉、夏末再據妙勝之席、披虛堂祖翁衣、有偈、十一年己亥、師八十六歲、六月新構法堂于龍山、鉅材良工不期而畢具焉、惟三柔仲偕來賀厦、九月微恙乃愈、十三年辛丑、師八十八歲、孟夏下浣、興新龍山正門及偏門、且築廢城礦銅池、畚鍤之役、徒侶汲然、檀度響合、仲夏之初成矣、七月十日、設齋修門成之賀儀、孟冬朔瘧發、三日服驅瘧之藥、而瘧散矣、然衰憊喘喘殆焉、十又九日、江刺史來謁、對話如常、十一月七日疾病焉、水漿不入口、廿一日卯時、泊然如寐坐逝、晡時定全身慈揚之塔、辭世頌曰、須彌南畔、誰會我禪、虛堂來也、不直半錢、

二、東海一休和尙年譜

後小松天皇應永元年甲戌

師剃利種、其母藤氏、南朝簪纓之胤、事後小松帝能奉箕箒、帝寵渥焉、或人譜曰、彼有南志、每袖劍伺帝、因出宮闈、而入編民家以產、師雖處襁褓之中、有龍鳳之姿、世無有識者、正月朔日出時出胎、

二年乙亥

三年丙子

四年丁丑

五年戊寅

六年己卯

師年六歲、投京師安國寺長老像外鑑公、執童子役、鑑呼曰周建、鑑乃龍光鐵舟濟公之嗣也、

七年庚辰

八年辛巳

九年壬午

十年癸未

十一年甲申

十二年乙酉

師年十二歲、淸叟仁藏主在寶幢寺前、講維摩經、聽者數百人、師亦往預、人皆目

師曰、少年有老去就、前程未可量也、

十三年丙戌

師年十三歲、竊發遊學志、出龜嶺（天龍寺）依東山、慕喆攀公、而學作詩之法、每日一首爲課、祥球書記亦有詩名、稱師有作者風、時有見惠侍者、諭師曰、吾祖別源翁有秋風白髮三千丈、夜雨青燈五十年之句、子誦之必入佳境、一日詠長門奉草、

有君恩淺處草方深之句、聞者吹服、（秋荒長信羨人吟徑路無媒上苑陰榮辱悲歡日前事君恩淺處草方深）

十四年丁亥

十五年戊子

師年十五歲、賦春衣宿花之詩、膾炙人口、（春衣宿花詩曰、吟行客袖幾時情、開落百花天地清、枕上香風疑耶、籍一場春夢不分明）

十六年己丑

師年十六歲、結制日聞秉拂僧喜記氏族門閥、掩耳出堂、乃作二偈呈慕喆翁、翁曰、今叢林頹靡非一柱可及、三十年後、子言必行、忍以待之、其偈曰、說法說禪舉姓名、辱人一句聽吞聲、問答若不識起倒、修羅勝負長無明、又曰、犀牛扇子與誰人、行者盧公來作賓、姓名議論法堂上、恰似百官朝紫宸、

十七年庚寅

師年十七歲、中秋無月、賦佳句入神、始依仁清叟于壬生、預于外書、及經、錄之講筵、兼扣起倒之義、清叟每應西宮夫人之請說戒、拉師與往、路過神泉苑、小虵出侯、叟下授安陀衣、爲唱戒法、則作馴伏狀、率以爲常、一日師竊袖啣石塊侯蜿蜒、便打殺、叟大美師曰、俊哉此舉、衲子手段舉措脫宜政若斯、爲謙翁唱關山宗旨于西金寺、閑房杜門、高風激世、師往造室、謙翁清叟追隨共五年、（仲秋無月詩曰、是無月只有名月、獨坐閑吟對鐵槊、天下詩人顯勝夕、雨聲一夜十年情）

十八年辛卯

師年十八歲、顯山相公留心々宗、色々革弊、聞清叟壽像僧着金伽黎、一日遽到菴所、欲見彼像、徒倡股栗、師偶在菴、請持幀子出迎、相公立砌下、赤松越州侍旁年少美丈夫也、師立屋簷上、欲親度與幀子於相公、赤松公咄之、進而出手接幀子、師握其手而作眄色、相公覽此像了回駕、從者曰、自非禪者、殆不見有此舉、蓋師無豪邁、以之可概見也、

稱光天皇應永十九年壬戌

師年十九歲一日師遊泉涌蘭若、坐有生客、師問傍僧、僧曰、來自龍寶山中、靈山派下闍黎也、師乃促牀打話、師謂僧曰、今龍寶佛法鋪席盛開、惟有曇首座一人、

在其餘祿々耳、僧驚曰、子能知吾家私、師曰、吾望江源爲登龍門、子能先容乎、後在江源逢着前僧、々曰、不待指南、善財在此、

廿年癸巳

師年廿歲、爲謙翁一日謂師曰、五蘊已傾倒於子、然吾無左證、故不證汝、其爲宿德器許如此、翁承因無因本色古衲子也、

以謙遜辭左卷故無因稱謙翁

廿一年甲午

師年二十一歲、臘月爲謙翁寂、致祭無資、徒心喪耳、辭詣清水寺、寺舊法自除日至上元、禁人斷穀焚誦、歸啓母氏、再詣清水寺、經歌中山、路出大津驛、驛亭人師驂衲勃窣而挾菜色、謂曰、雛閣黎汝何人、豈非師呵咄定後母陰辱耶、國俗歲晏家設胡餅、餅偶成焉、與師數枚喫々了、卽達石山大士像前、默禱道念、堅勁無他懇焉、焚誦七日、山中有僧、延師過菴、保待甚厚、洞下僧也、出其家話一百則者、需師書之、師疾書而予、彼喜出金以備旅費、一日起大士像前、遙步湖橋、竊意語吾投身水中、若得命全、則大士加被無疑、否則雖委魚腹、它日必遂所志、大士豈舍我、諸將投之、頃忽母氏信使至、掖而遏住曰、毀身失孝、悟道有日、勿爲遲也、師不獲已、歸京覲母

廿二年乙未

師年二十二歲、初赴江之堅田、求謁於華叟師、閉門峻拒、師意誓、吾不得一謁、決死於此矣、露眠草宿、不少屈、夜投虛舟、旦造菴前、既經四五日、叟偶赴村齋、出門見師、蒲伏門側、而顧左右曰、前日僧猶在此、急須水洒杖、遂齋退歸菴、見師猶屹不去、遂延以處置、一語投契、孳々參請、有一僧妬師資相得、讒吻數啓先師、謀師佯爲之問、彼恒伺師、取炊巾入室、百計胥拒、或倩童子、以訟先師曰、每人參問、則純子必、沿壁伏牀聽之、他日渠不可測、師恐未知、先師、只叱逐童子、不問倩主、蓋嘗使師屬墻壁之耳也、服勤凡九年、得其要領、早在三四年之速矣、

廿三年丙申

師年二十三歲、華叟會裡枯澹甚矣、齋盂不再露、江菴濱湖、漁者爭隈、師與一舟子善、夜每借其篷宿、功夫達曙、舟子憫師能耐饑寒、每設飣盤羞焉、其妻刻甚、數轢羹釜、師囊儲屢窶、歸京或製香包、及難婦彩衣、得金則徑赴堅田、旅具不設、鞋笠蕭疎、如適城市之易、然華叟師平居辛辣、色不少假、一日命師剉藥、指血下染藥砧、叟直視師曰、子壯大手指、軟弱如此乎、師聞此、手彌戰、叟微有哭容、

廿四年丁酉

師年二十四歲、謙岩冲公以作者鳴、與華叟師世系也、開爐有偈、呈華叟師、師和

曰、展開兩手當爐處、陜府鐵牛白汗流、省師和、和曰、撥盡寒灰臘寂子、瀉山眼重火星流、叟誇岩曰、純子避老僧一頭地、

廿五年戊戌

師年二十五歲、一日聞瞽者演妓王失寵落飾之事、忽於雲門放洞山三頓棒因緣投機、華叟師一日書一休二大字、與師爲號

廿六年己亥

師年二十六歲、宗頤首座繪先師像求讚、讚有頤來的々村兒孫之句、頤公誤認爲認可語、而稍々訓人、先師聞此震怒、忽欲把幢子來付一火、師出啓先師曰、頤兄老大、久在和尚會裡、人皆知之、今遽火幢子、彼何面目之見人哉、和尚百年後彼若漫稱劵開口、則吾必橫身破斥之、勿爲慮也、先師怒少霽、因把幢子付頤兄曰、兄能嘗膽勿忘焉、

（口呑佛祖喉乾坤、手裡竹篦天魔魂一句語提三要印、頤來的々付兒孫●）

廿七年庚子

師年二十七歲、夏夜聞鴉有省、卽擧所見、先師曰、此是羅漢境界、非作家衲子、師曰、某只喜羅漢、而嫌作家耳、先師曰、儞是眞作家也、先師欲偈記之曰、十年以前識情心、嗔恚豪機在卽今、鴉笑出塵羅漢果、昭陽日影玉顏吟、師作此偈、乃是年

五月二十日夜也、五月先師書一劵、力腰疾、興赴京、囑宗橘夫人付一帖子曰、吾暮景已迫、西崦行脚在近、此帖子是靈山如意、及老僧遞代家劵也、前年已付純子、彼擲地拂袖去、彼之豪邁非可彊也、橘爾待彼豪邁稍屈、付託時熟以付之、是老僧願命也、欽哉、橘字花林、實吾門尼惣持也、蚤升如意堂、晩入華叟室、與師法友于而義骨肉也、帖子付託日、橘啓華叟師曰、吾老且獨、叟指師曰、可子以子、豈有過純哉、橘曰、奈非骨肉何、叟便問、橘爾如何是養子緣、橘曰、他家自有通宵路、叟曰、心徑苦生時如何、曰、彩鳳舞旦霄、純爾如何是養子緣、師曰、鐵樹抽枝、枯木生花、曰、意旨如何、曰、滴水滴凍、曰、和泥合水時如何、曰、斬成兩段、曰、一刀兩段時如何曰、滴水滴凍、曰、枯木再生花、橘却曰、各志言矣、願聞師志、如何是養子緣、叟曰、何似坐、曰、心徑苦生時如何、叟曰、賸、橘揖曰、有此父、有此子、其母豈不任立孤之託乎哉、

廿八年辛丑

師年二十八歲、先師腰疾不起、塊坐一榻、二利共設承器、左右輪次除穢、衆皆用籌子刷、師獨下手指、以袪雪之、曰、師翁之穢、何厭之哉、衆有慚色、

廿九年壬寅

師年二十九歲、十月九日、如意菴設三十三回忌齋、華叟師力疾赴會、師與俱預

席焉、舉衆道具齊整、師獨布衣草屨龍鍾也、華叟師顧師曰、汝何無威儀、師曰、余獨潤色一衆、蓋貶膺緇之牛裾也、點心罷、華叟師燕息如意之西軒、先日照來謁、問曰、和尙百年之後、付法誰人、曰雖道風狂、有箇純子、

三十年癸卯

師年三十歲、一日會堪堂、面有刀瘡、故人名驗、藏湛堂于土岐館、館有父、名象、而其子曰猿者、滑稽傾座、堂指猿問曰、象爲甚麼生猿、師答曰、懷州牛喫禾、益州馬腹脹、堂曰、懷州與益州相去多少、師曰、天地同根、萬物一體、堂無語、師拊背堂曰、到江吳地盡、隔岸越山多、華叟師傳聞曰、純藏主答太過於問、對牛之琴不可彈也、後數日、又曰、純藏主吾家裡人、不可無此答焉、

卅一年甲辰

師年三十一歲、岐嶽周和尙符橫嶽祖師之遠識、而領柱杖以歸、爲人落魄不羈、住龍山日、招官寺少年、而看雲亭上置酒放浪、一日問師曰、汝識老僧境界否、答曰、茂陵多病後、猶愛卓文君、嶽領焉、乃請師題無頭牓、國師識曰、吾滅後一百年住此山者、乃吾後身也、留杖必付之

卅二年乙巳

卅三年丙午

卅四年丁未

師年三十四歲、後小松帝付神器於稱光帝以降、聖念特在師、鍾愛愈篤、故時々召對、前席亹々、問道譚禪、大稱宸衷、稱光帝將入蒼梧、大寶當仁、負扆不讓、朕其任誰、睿慮猶豫、師密入奏曰、咨天曆數、正在彥仁王之躬、時不可失、勿待左右祖、帝曰、朕儲定矣、師言、良哉、玉璽歸彥仁王之手、則師之功績不爲不鉅多也、又一日對御之次、帝曰、空谷性海兩禪衲、本色爲誰、請師擇焉、師曰、吾恐空谷不在性海下、海文字習未脫、谷名利念兩亡、於是追崇空谷爲帝師、謚賜佛日常光、相國佛日常光國師諱明應、字空谷、嘉曆三年戊辰、六月廿四日生、嗣天龍無極玄玄嗣夢窓國師、○東福性海和尙諱靈見、自號不遷子、正和四年乙卯生、康永元之初秋入宋、嗣无關、應永三年丙子三月廿一日示化、八十二歲、

後花園天皇正長元年戊申、

師年三十五歲、六月二十七日、華叟師寂焉、聞訃倉皇拉成子赴堅田、以致祭、一七日諸徒各散、師亦還京、

永享元年己酉

二年庚戌

三年辛亥

四年壬子

師年三十九歲、冬攜沅子、遊泉、時有女子名彭、自殺其夫、請師秉炬、其語曰、手裡

吹毛、能死能活、小姑彭郎、一刀兩割、擲火炬於背後、赴茶毘會者火星點衣、師一日入檀家、欄有老牛、戲書一偈掛其角端云、異類行中是我會、能依境也、境依能、出生忘却來時路、不識前身誰氏僧、其夜牛斃矣、翌日牛主戲師頭殺吾牛、師一唉、

五年癸丑

師年四十歲、後小松帝不豫、登遐前數日降宣召師、師密入仙院、對御候問、咫尺龍牀、略演心要、喜見龍顏、因命侍臣、發金匣把先朝寶墨、及草飛白等數帖來、親賜師曰、朕雖在天、以此併法寶居矣、國祚陰翼師本職、而不在朕言也、師拜稽首而去、遂以十月二十日崩、師生乎一針不蓄、況餘長哉、惟此墨硯寶貯小葛籠、到處相隨身不暫離

六年甲寅

七年乙卯

師年四十二歲、曾在泉南、每出遊街市、持一木劍彈鋏、市人爭問師、劍以殺爲功、師持此劍、是甚麼用、答曰、汝等未知、今諸方賣知識似此木劍、收在室則殆似眞劍、拔出室則只木片耳、殺猶不能、況活人乎、人皆咲之、瑞子繪師像、曲錄牀角靠長劍、以代烏藤、讀有吹毛三尺發動烟塵之句、

八年丙辰

師歲四十三歲、是年丁開山國師百年遠忌、師往拜、塔下一女子、戴衣囊而隨後、仍述偈以當齋供、有祖師遷化已百載、空拜婆年婆子裙等句、

（囊覓青銅無半文、酬恩一句豈驚群、祖師遷化已百載、空拜婆年婆子裙、○又兒孫多蹈上頭關、一箇狂雲江海間、大會齋還在何處、白雲蒸飯五台山）

九年丁巳

師年四十四歲、師暫寓源宰相館（土御門殿）一日心地不快、竊意謂今、佛法混亂無具大眼目者、龍蛇不辨、邪正駁襍、纔持一紙券、則皆曰吾嗣某法、浩々如麻、賣徒之覆轍其可不戒哉、卽命相公開故篋、把遞代券來、段々花擘、一炬爐之、其券契曰、純藏主悟徹後、與一紙法語、道是甚麼繫驢橛、拂袖去、可謂瞎驢邊滅類也、臨濟正法若墮地、汝出世來扶起、此汝是我一子也、念之思之、應永二十七年五月日、華叟、下有華字、先是帖子付託之座、沂成二子在焉、二子共伽黎也、帖子大法所係、僧恐犯其器、源相外縫接、而內伽黎久嚮師風、故橘夫人囑託之源相、

十年戊午

師年四十五歲、銅駝坊北（冷泉萬里小路）有故人小廬、破垣敗簀、人不堪其憂、師樂此、而設一圓蒲席坐、非咨詢之輩謝絕不接、

十一年己未

師年四十六歲、是年明遠智公寂、龍山宿德、知師佩華叟和尙正印、每々稱師於稠席之席、剛介不阿之先人也、

十二年庚申

師年四十七歲、六月二十日徒門老請師入住如意菴、二十七日、欲設先師華叟和尙一十三回之忌齋、泉人雜還畢集于大用菴、且懷香錢賀師住菴、紛冗非素、粗叙寒暄而已、二十九日一偈題校割末、以貼菴壁、一偈呈養叟老人、以致退席之意、包笠徑歸、乃七月朔也、

題校割末詩、將常住物置菴中、未約笊籬掛壁東、我無如此閑家具、江海多年蓑笠風、

嘉吉元年辛酉

師年四十八歲、安衆坊之南、（鹽小路町）村檀後圃、草屋數楹、修竹環軒、朴野可禪、師請而燕息者一月餘、育子侍閑居次、避席啓師曰、五家宗旨已見貫花、七宗之綱領門下語、師逐一下語、育子佩服、

二年壬戌

師年四十九歲、師初入讓羽山、借民家住、有山居偈、後創尸陀寺徙焉、徒侶慕而到者、皆爲法忘軀之流、故拾枯掬磵、岩路盤屈、汲々而勿倦、讓羽爲名、朝貢出石灰地、讓羽出灰、和訓相近、瑞子舊朝臣也、故曾熟此地、是以先容、

三年癸亥

師年五十歲、大炊御門室町畔有屋、主常不在、（乃陶山公家妾宅也）閑寂宜師、陶公館師、於此日夕保護、來者屨滿、亡何辭去、

文安元年甲子

師年五十一歲、關山一派昔被擯斥以來、未嘗山中往還、況亦可錙銖敢入其手哉、舜日峯以官命將住山、養叟和尙會師而欲拒其入寺、師假作門看、叟假作日峯、問答數番、約彼負隨則不許入門、師先橫棒跨門限、叟學峯來之儀、假看拶曰、自門入者不是家珍、假峯衝口曰、如何是家珍、看乃叟棒曰、呑舟之魚、不遊龍門、峯拂袖去、看曰、好云西天路、迢々十萬里、師謂養叟曰、義勇既如此、官命實不可拒也、叟撫然

二年乙丑

三年丙寅

師年五十三歲、土州太平舜日峯參徒也、一日來謁問曰、德山入門便棒、其口未合、後句將來、師返詰曰、本有圓成佛從甚麼處來、平曰、看々、師打曰、龍頭蛇尾漢、平無語、蓋雖飽參自負者、一到師面前則皆奪機含糊退、所謂無尾也猢猻子、不消一胡蘆、

四年丁卯

師年五十四歲龍山多故數僧獄繫一門心酸秋九月師心疾革潛入讓羽山將食死事達宸聽卽降勅批曰和尙決有此舉佛法王法俱滅師豈舍朕乎哉師豈忘國乎哉師答勅曰貧道亦率土之一民耳命可敢辭耶重陽日述九偈以示衆月尾歸京

五年戊辰

師年五十五歲是年假寓雙杉（俗曰本杉）小菴三五日乃歸永昌坊口之菴（乃陶山公舊第菴曰寶扇）暇日謂左右曰曩日所焚之券猶有人襲藏否吾膺爲礙自覺有此非他告也瑞子啓曰有此哉不免出堂披覽則糊破紙爲全券蓋諸子不忍火寶惜囊秘師丞呼火炬焚了

寶德元年己巳

師年五十六歲一日街頭逢僧問師曰市中有隱否師曰有僧曰如何是市中隱師曰何似生僧無語師打僧

二年庚午

師年五十七歲熟視諸方邪解牛毛正見麟角乃自欲策己且箴吾徒手書規文數通遍囑當軸在宮所人以畏而能外護吾門者各送一通曰老拙生平未曾印

一人恐吾辭世後爲人口不啞密付印不刑或自負佛法潛作家則不涉欵案鞭撻急須告御史獄繫是法之姦賊而吾之怨敵也勗哉護法之任其可旁縮手觀哉

三年辛未

師年五十八歲興春作嘗撰國師行狀筆無史體具狀達官貴戚奔趨之迹不錄艱苦行乞不刪之行師補文欠以一偈題狀末曰挑起大燈輝一天鑾輿競譽法堂前風飡水宿無人記第五橋邊二十年養叟和尙聞此嫚笑曰先國師可狀之行豈必寒乞云焉乎哉通訴一子久親炙叟者不忍匿唉啣叟不知言便辭去見師師近接厚待頗出等伍蓋褒其師資背馳也

享德元年壬申

師年五十九歲遷瞎驢菴々在賣扇菴南亦是陶山公所置也

二年癸酉

師歲六十歲師叔惟山和尙（養叟和尙嗣）住龍山師遣徒弟數輩助開堂之化儀七日鬱攸爲祟鐘魚索然惟浴堂門廡及如意大用僅存養叟和尙乃毀大用以爲靈光之塔師作題塔偈曰草創百二十八年看來今日體中玄正邪境法滅却後猶是大燈輝大千

三年甲戌

師年六十一歲、師一日攜瑞子、特謁養叟和尚、將叙間濶、諸徒諫止、師意不決、便先詣靈山眞前、燒香拈闍、吾將詣大用致拜、不知祖意如何、瞑拈中拜闍、徑造叟、叟徒出嫚罵師、叟叱、其徒退、乃延接、從容曰、一來奉遲、近將遣价諭之、先師頭面潑糞水公也、然吾未向他說、只對吾徒說之、師曰、豈不云哉、家裡人說家裡話、不向他說、非師兄恩、糞水之義、請細指陳、叟曰、聞公學百丈餓死話、及靈山和尚示榮衒從法語、示學侶、先師在日、未此等語、師曰、吾以百丈餓死、別不立話頭、不作食之事、詳見虛堂祖翁普說、且靈山法語、先師每日苦言及其說、公其健忘乎、聞公稱非參禪、示其徒、此語先師在日未聞之、昔佐侍者參乾峯、法身話而知非、知非乃悟、豈別有非參禪耶、然則公自糞水於頭面、非于先師也、叟作色曰、吾手有券、公何漫議乎、師曰、余亦有券、非公券比、叟曰、吾不敢保公無券、師大笑而出去、從比法券之義、永絕焉、師已焚券、於此稱券、則蓋弗違先師曩昔之一約也、冬、養叟和尚赴泉南慶陽春新菴、垂示入室、鼓簧男女、或人作偈調之、

康正元年乙亥

師年六十二歲、正月、泉南調偈傳達於師、々次其韻者二百餘首、編作一卷、題曰自戒、師一日赴天平齋、有深首座、舜日峯之徒也、齋罷出問師曰、龍峯山裡龍如

何出頭、師不答而詬罵曰、子此一問無體裁、故吾箭答口、子徐聞之、昔天明老人問靈山和尚曰、金翅鳥王當宇宙、龍寶山裡龍爭出頭、一問樣子已如此、子無拶人句漫拶人乎、今天下知問答之起倒者無一個、汝師日峯老々大々、殊不知好惡云々、

天明居士於紫野問靈山云、金翅鳥王當宇宙、龍寶山裡龍如何彰、靈山答云、開口看瞻、明云、胡亂長老、如麻似粟、山云、卓上老僧梵天、明作禮退

二年丙子

師年六十三歲、薪之妙勝乃大應國師之道場、而祖堂未塑遺像、僉曰、鐵典、師募木工以安焉、薪人拜如在也

新造大應國師像、僞活眼大開眞面門、千秋後尚弄精魂、虛堂的子老南浦、東海狂雲七世孫

長祿元年丁丑

師年六十四歲、夏末入薪、居十餘日、細川源京兆介龍安秉義天、略致外護之意、且闢幕下館、迎待甚渥、蓋此時途中逢熙藏主春浦和尚、痛罵法中姦賊、其徒欲加害於師、流言紛々、

二年戊寅

三年己卯

師年六十六歲、或人賣虛堂祖翁唐本畫像、上有自贊曰、容易肯人、難與共語、竹

篦頭惜之如金、禪牀角委之如土、淨覃知藏善知機、電光影裡分賓主、休子歇更也

奉金購以捨酬恩常住、時像猶在京酬恩、塔主夜夢瞎驢和尚得々來、翌早說夢、

等子時居酬恩、所夢偶同、而不敢言午後果虛堂像至、掛壁各拜、塔主曰、夢乃瞎

驢和尚、覺則虛堂翁、堂其和尚前身乎、如夢而來、不亦奇乎、等子亦說人曰、夢乃

有同乎、春初領住德禪之請、疏仍表視篆之義、入而禮祖塔者三、揷香大展了、次

詣日照光和尚一揖

寬正元年庚辰

師年六十七歲、華叟入滅、已三十三回、師先忌齋庚、率香錢以送龍山、復往拜三

祖塔、且謁光日照、楫茶人事而已、

二年辛己

師年六十八歲、春遊嵯峨、路經西京、入拜龍翔之塔、荒涼僧少、堂宇傾欹、照堂特

龍山所營、而獨無恙、庫院最廢、而鼓飯瘖焉、師慨焉、率錢數千緡、以新之、不日成

矣、

感龍翔寺廢僞云、常住物誰用已身、山門殿致剪松鈎殿堂只興花零落、廢址秋風二月春、

三年壬午

師年六十九歲、春戲製勾欄曲、命寧童歌舞、酒闌自舞、秋八月患痢、諸子咸曰、師

逝也、師曰、吾必無恙、九月痢止、心地稍快、十三日、避亂寓桂林尼寺、

四年癸未

師年七十歲、七月入賀茂山、寓大燈寺、臘尾歸瞎驢菴、

五年甲申

寬正五年冬至日、作虛堂贊、臨濟正傳誰棟梁、慈明禍岐又虛堂、東海兒孫七世子、大燈室的々靈光、

六年乙酉

今上天皇文正元年丙辰

應仁元年丁亥

師年七十四歲、六月兵起、京師兩宮駐蹕於相府、劉頂雌雄未可決、八月師出瞎

驢菴、徙東麓之虎丘、是時都下大亂、瞎驢亦燬乎兵火、九月朔、師出虎丘、入薪之

酬恩菴、一村父老皆欣々然而有喜色、先是十餘年來、師每誡諸徒曰、兵烝其兆

焉、雖京其潰焉、汝等急打辦旅裝、備於倉卒、或臻乎、作爲偈句以警之、於此人皆

服師先見、

二年戊子

師年七十五歲、五月十五日、設大會齋、緇白來赴、妙勝酬恩、方來殆無措足地、蓋

修靈山和尚一百年之遠忌也、凡都鄙慕師風欽師德、一承師顏者、無少無老、僉

不召來助、伊蒲之供、惟恐後焉、秋書示多福菴禪竹、（蕭在之今春大夫也）法語一通、

（靈山和尚百年忌偈、僧運酬恩妙勝蕭、靈山昔日涅槃辰、二千四百年前境、梅雨流紅五月春、○又嫡兒率伴出人前、麗鞋人家常說禪、龍寶山中辛滅却、靈山記莉瞎驢邊、）

文明元年己丑

師年七十六歲、夏讚松源祖師像、畫者墨谿繪靈靈見桃、香嚴擊竹干佛龕障子師一見絕倒題偈、爲陳侍者作睦州織鞋圖讚、七月西兵入薪、徑入餅原之慈濟菴、八月二日、出餅原入南京、方一宿也、三日入泉信宿、五日出泉、僑住吉浦之松栖菴、此地蓋以卓然和尚甘棠遺蔭可慕、而泉津獠鄉不可居也、

（贊松和尚、松源靈隱老師禪、破法攀條有數錢、囊中我沒半文蕎、狂客江山三十年、○又巡堂合掌又燒香、堅拂拈槌座木牀、臨濟正傳也何處、一休東海斷愁腸、應仁三年孟夏日、東海純一休拜贊、○見桃偈、見處風流悟道心、桃花一朶價千金、瑤池王母春風面、我約愁人雲雨吟、○擊竹偈、對畫忽然靈誠情、道人龜鑑太分明、娛生佛見南陽墟、腸斷黃陵夜雨聲、）

二年庚寅

師年七十七歲、有一檀越、占菴坂井之上、以延師、師喜而携諸徒徙、扁其菴曰雲門、蓋以龍山雲門祖塔亂後草白、聊存其名、以擬靈光巋存也、

三年辛卯

四年壬辰

師年七十九歲、或入出小幀子、以需書牌位、卽點筆書與之、曰、住德禪某甲盧堂

七世天下老和尚、

五年癸巳

師年八十歲、八月行在所、擲蕞院、曰大德、迎開山靈山如意像于藪里、以安奉焉、祖翁三塔香火所存、豈可忽諸、乃課門客、奉貨泉以送矣、

六年甲午

師年八十一歲、二月二十二日廣德寺（攝州尼崎）柔中隆和尚捧勅黃來、致大德住持之請、不可辭也、師作二偈、且謝且警、柔中和尚寓本色住山祖教中興之祝、且求入寺法話、卒書而應之、八月染瘧、月尾少間、玆年衆已踰一百餘人、師不懌曰、靈山和尚會下衆不漏百人、吾何爲乎致有之也、

七年乙未

師年八十二歲、薪之虎丘作壽塔而落矣、師揭軒楣以慈楊塔、且作偈示衆、其意有自也、

（偈曰、不是平生好境瘦、任陀鷄足月黃昏、誰氏風流我盟約、馬鬼青塚舊精魂、）

八年丙申

師年八十三歲、四月瘧疾少發、五月望有人献韻府數冊、師獲而喜甚、語左右曰、此冊曩予與華叟先師有少逆而辭去、歸京途中遇讚竪者（華叟師偈妊也）曰、子今何之、

師件々縷說辭意、竪者携師歸、再謁先師、々曰、來也、儞辭吾出去、何爲留書無、乃眷戀之至乎、撫愛倍舊、後霜雨浹旬、崖崩損菴窓、書蝕土中、冊數不全、泥痕猶存、而書卷破、此其驗也、今幸屬余、吁天哉、物歸有主、披而一覽、宛如見先師再謁時之面、仍祥書一偈於外裝紙、以爲家寶、誡諸子曰、莫散共也、蔬圃有隙地、縛茆以館柔中和尙、諸徒求扁、々曰、牀菜、且偈以示衆、臘月衆求三轉語、師不得已垂示三轉曰、天高地厚、赤肉白骨、逼塞乾坤底、大人境界也麽、又曰、三世了達漢、如來禪祖師禪、又曰、欲知箇兩轉語、須到彌勒下生辰、

九年丁酉

師年八十四歲、春夏無恙、牀菜巷南畔修竹成林、宜乎納凉、師每夏苦熱甚、竹間構小亭、刈蘆爲葺、編竹爲牀、師乘轎子行、半日消搖扇亭曰多香、香多福香、殿風流可慕、仍作偈以題亭之側、九月河兵入津、二十八日、籃輿赴泉之小島、居半月餘、十月十八日、發島宿安松之草舍、十九日、衝雨歸墨江之舊栖、神主出迎驩甚、月尾微恙不病而問焉、

十年戊戌

師年八十五歲、二月中浣師預推如意祖翁一百年遠忌、却後十有二年、已酉歲也、吾旦暮人也、急命諸徒、率財營供于慈恩寺、請鄰封僧尼、實三月初九日也、十

二日、出住吉浦赴薪、老幼遮道以慕、臻攀轅曳衣、揮淚而別、六月捨墨江雲門于龍山、欲復靈光之祖塔也、七月再創如意祖塔而落焉、夏末再據妙勝之席、披虛堂祖翁衣、有偈曰、運菴遷衣、純先留衣、截作兩段是松源衣、

十一年己亥

師年八十六歲、六月新構法堂于龍山、鉅材良工不期而畢具焉、惟三柔中借來賀厦、九月微恙乃愈、

十二年庚子

師年八十七歲、正月三日爲江州刺史、作自讚、劒篦之像也、細川右馬廐寄紙需書、無字下書偈與之、因以宗鏡錄一部爲贐、

十三年辛丑

師年八十八歲、孟夏下浣、興新龍山正門及偏門、且築廢城礦銅池、畚鋪之役、徒侶汲然、檀度響合、仲夏之初成矣、七月十日設齋修門成之賀儀、孟冬朔瘧發、三日服驅瘧之藥、而瘧散矣、然衰憊喘々、殆焉十有九日、江刺史來謁、對話如常、十一月七日疾病焉、水漿不入口、二十一日卯時、泊然如寢、半逝、晡時、定全身于慈楊之塔、遺命諸徒不得披麻祭奠過儀、平日所述頌古偈贊等、編曰狂雲集、已爲人傳所稱、師之爲性、等慈莅物、貴賤一目、視敗夫鬻豎不爲疏、遇待僧門生不爲

親故童稚挽鬚而馴、鳥雀就手而食、濟惠是喜、隨得隨與嬉笑怒罵、潛鞭密鍊、生平意誓、縱雖得一箇半箇種草、吾必斷絕、況痛惡諸方咒銅羽養之風、而臨學者彌辛棘、或有欲參請者、曰、吾已耄矣、然逢其人、則百種、施設、功譬旁引、猶如常山蛇餘尾擊應、是其緒餘而已、若其具佛祖大機大用則縱雖僧家南董、吾恐一筆所不能紀云爾、

一休和尚傳

畢

米峰和尚、突如書を飛ばして其の舊著の跋を徵す。凡そ著書に於ける他人の序跋は、著者の爲めにも讀者の爲めにも贅疣にして無用中の無用也。和尚豈之を知らざらんや。能く知つて而して余の跋を徵する所以、蓋し佛教のブの字も知らざる余の冗語の如きは、有るも可、無きも可、十目の見る處、和尚の著書をして決して重からしむる心配なきを安心して、料理のツマと同樣に心得たるならん。

余は佛教のブの字も知らず、高僧傳の如きは風馬牛也。一休何人ぞや。殆んど知らざれども知らうとも思はず。余の知れる一休は種員の假名反古一休双紙と京傳の醉菩提とに現れたる狂歌の器用な愛嬌坊主にして、今なら落語の前座が勤まりさうなれども、日本の佛教界に何を貢

獻したりしやを知らず算盤を彈いて書物を安く賣る米峰和尚の方が二三割方ェラさうに思はる。少くも一休を俘として飯粒と代へたる米峰は本來くふの極意を遙に辨へたりと云つべし。

去りながら肉食妻帶天下御免の今日の世の中庫裏にクサヤの臭ひあり、墓場に襁褓の干したるあり、坊主頭の直綴で新婚の大廂と手を引合つて緣日のそゞろ歩きするも珍らしからず、角刈の鳥打脊廣で自轉車飛ばして檀家廻りをするビジネス宗あれば、本堂の片隅にピヤノを置いて女優の品定めをする藝術宗もあり、法華經よりは浪花節、碧巖よりはニーチエイズム、我れ本來木の股から生れたるに非ずと大悟徹底したる累々たる肉團々、一休

生れ來らば何といふらん。

尤も戒行敎相に俘はれて菩薩の樣な顏したるばかりが僧らしき僧に非ず、將た又檀家や講中との取引を圓滿に處理するお寺株式會社の業務擔當員だけが殊勝らしき坊さんに非ず、さりとて僧と云はるゝを嫌ひて宗敎家と稱し、袈裟ころもよりは洋服を着て、爺婆を相手に阿彌陀樣の說法をするよりは、靑年男女を集めて、本能主義と印度哲學との共通點や、國體と佛敎との關係を演說して、在家だか僧侶だか解らぬやうな顏してゐるのが文明流の善知識にも非ざるべし。將來の佛敎がどうなるか解らぬが、此鹽梅にてはセ、ツシヨン式鐵筋コンクリートの大伽藍、ポスト・アンプレッシヨニストの壁畫の背景にロダ

ン張の本尊さまを安置して、我々善男善女に切符の押賣をし、オーケストラのオーバーチュアに本堂を開扉し、燕尾服にメダルを下げたる大和尚が雲右衞門張りのお説教をする時代も決して遠かるまじく思はる。今の中に三十棒か三百棒でも喝つて冥土の旅に出掛けた方がまだまだ浮ばれさう也。

一休、汝の骨は土となり茄子か南瓜の肥しとなつて了つたらうが、汝の人魄が若し何處かにフワリフワリとしてゐるならば聞け、汝元來鯰の如し、一生をヌラリクラリとして終りたれども折々鬚の尖きにてチクリと刺す、汝若し敎化の本願あらば菩提の爲めに地震となつて末世の僧を壓し潰せよや。

遮莫れ、釋師の張扇にまで叩かれたる汝、殺活自在機智縱横なる米峰和尚の茶の子となつて、餓鬼の空腹を供養す。怎麼滴々墨汁裡萬朶花、氷雪原頭春光麗、佛出さうと鬼を出さうと氣隨氣儘の米峰禿顱の筆力汝は會せりや否や。一休枯髑髏となりて春風秋雨幾百年、水は流れて沈々、風は吹て颯々。

改元八月

魯庵生

昭和十七年十月二十日印刷
昭和十七年十月二十五日發行

一休和尚傳（改修版）
（停）定價金貳圓五拾錢

著作者　東京市本郷區駒込曙町五番地　高島米峰
發行者　東京市神田區錦町一丁目十六番地　三樹彰
印刷者　東京市本郷區駒込林町百七十二番地（東東二五）柴山則常
印刷所　東京市本郷區駒込林町百七十二番地　合資會社杏林舍

（出版協會承認番號 あ270147）

不許複製

發行所　東京市神田區錦町一丁目十六番地　振替口座東京四九九一番　明治書院

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

（日本出版文化協會會員番號三一四〇〇八番）

人工3-4-6

▲四十二章經講話　高島米峰先生著　定價一・五〇

▲遺教經講話　高島米峰先生著　定價一・五〇

▲般若心經講話　高島米峰先生著　定價二・〇〇

▲信ずる力　高島米峰先生著　定價一・五〇

▲同じ方向へ　高島米峰先生著　定價一・三〇

▲隨筆散彈　高島米峰先生著　定價一・三〇

▲人世小觀　高島米峰先生著　定價一・五〇

▲米峰曰はく　高島米峰先生著　定價一・五〇

▲大乘起信論講話　村上專精先生著　定價一・七〇

▲觀音經講話　加藤咄堂先生著　定價一・五〇

▲華嚴五教章講話　齊藤唯信先生著　定價二・〇〇

▲從容錄講話（普及版）　秋野孝道先生著　定價四・八〇

▲碧巖集講話（普及版）　秋野孝道先生著　定價三・八〇

▲信心銘講話　新井石禪先生著　定價一・五〇

▲歎異鈔講話　梅原眞隆先生著　定價一・五〇

▲日蓮宗綱要　清水梁山先生著　定價一・〇〇

▲眞宗綱要　鈴木法深先生著　定價二・〇〇

▲三論宗綱要　前田慧雲先生著　定價二・〇〇

東京市神田區錦町一丁目　明治書院　振替東京四九九一番

78
44

終